



解体前の京町家

ふるさと

一

『あのころ、こんな暮らしがあつた 昭和恋々』（山本夏彦／久世光彦著 文春文庫刊）

この著書に書かれている情景は昭和最後の時に生まれた私たちの目頭を熱くし、胸を懐かしさでしめつけた。

実際に見たわけでも、その時代に、そこにいたわけでもないのに感じる切なさと寂しさ。

この懐かしい郷愁の思いは世代をこえ、地域をこえ、不思議と共有することのできる情操の一つではないだろうか。

『逝きし世の面影』（渡辺京二著

平凡社ライブラリー刊）

明治維新時、ヒュースケンは可能な通訳として、ハリスに形影のごとく付き従った人物である。江戸で幕府有司（官吏）として通商条約をめぐつて交渉が続いた1857年12月7日の日記に次のように記した。

「いまや私がいとしさを覚え始めている国よ。

この進歩は本当にお前のための文明なのか。

この國の人々の質朴な習俗と共にその飾り気のなさを私は賛美する。

この國土のゆたかさを見、いたるところに満ちている子供たちの嬉しい笑い声を聞き、そしてどこにも悲惨なものを見いだす事ができなかつた。

私は、

おお、神よ

この幸福な情景が今や終わりを迎えるとしており、

西洋の人々が彼らに重大な悪徳を持ち込もうとしているように思われてならない』

## 二

ヒュースケンはこの時、一年二ヶ月の観察期間を経ており、決して単なる旅行者の安っぽい感傷を語ったわけではない。

同様に長崎海軍伝習所の教育隊長カッテンディーケは2年の月日を長崎で過ごしており、次のように

「**先祖様との共同作業**

そこは京都市の北東に位置する洛外にあり、庭先に隣接する原野の梅の大木が迎え入れてくれた。

0-1テストにより解体するべき箇所を出し、壊しては、片付け、壊しては、片付けを延々と続けていた。

に記した。

「私は心中でどうか今一度ここに来て、この美しい国をみる幸運に巡り会いたいものだとひそかに希つた。

しかし同時に私はまた、日本はこれまで実に幸福に恵まれていたが、今後はどれほど多くの災難に出遭うかと思えば、恐ろしさに耐えなかつたゆえに、心も一層に暗くなつた」



(上) 野原の奥に梅の大木

(下) 土間のはつり作業 (左) 解体作業壁剥し



自然素材も長年放置しておくと

穢れを吸っているようで、漆喰、土壁、竹木舞までもが容赦無く0

1に、捨てるように示される。

京都の狭い道ゆえに車両が入れず夫婦一人、手運びの作業で0・1がプラスと出るまで続けられた。

毎日埃と土をかぶり、汗にまみれ、雨でも自転車で一人通つた。

なんとか無事に解体が終わつた家は、柱と梁、桁、屋根のみの、すつ

からかんとなつた。

解体により、ようやく光が家の中に差し込む。

そこには解体前の重々しい空気も、苦しそうなコンクリート土間

も何もない。

穢れを祓われ、静かに佇む木の柱があり、太陽の陽にあたり、何

やら語りかけているように感じる。家全体からは長年の重荷が解かれ、ほつとしているようにすら感

じられる。



解体作業で顔中、塵まみれ

「日本民族の、ご先祖様たちの心を感じ、心を受け継ぐ家。」

決して職人技とは思えないガタガタの壁に、当時を生きる人々の心と重なつた。折しも、心に強く芽生えた事がある。

家の解体と同時期に起つたこの症状は毎日悪化し一ヶ月以上

この先、私たちがいなくなつた後もここに住まう人々の心に日本の心がしっかりと受け継がれ、心が育まれる家にしよう。

今を生きる私たちはご先祖様たちから子供達、孫たち、未来へと、大切な何かを繋ぐ役割がある。

心で生きるのだ。」



## 有から無へ

### 五

「頭がかゆい、見てくれへん：」主人の枕にシミがついている。

何日も前から気にはなつていたのだが、自身もクタクタで家族の健康管理を怠つてしまつた。

左側頭部十円玉よりも大きいぞ。五百円玉ほどの面積に真っ赤な肉が膿をドクドクと出していた。

突然背筋が凍りついた。なんの知識も無く不安だけが膨れ上がる。キヤベツや白菜をかぶせたり、思いつく限りのことをしてが症状は良くならない。

まほろばのカタログをかたつぱしから0・1テストし、「アスタジー」にプラス反応が出た。薦めをもすがる想いで早速注文をさせていただき、1日の飲む回数、量を0・1で決め飲み始める。すると、どうであろうか。二日

体を治すものはないかと「まほろば」のカタログをかたつぱしから0・1テストし、「アスタジー」にプラス反応が出た。

まほろばをもすがる想いで早速注文をさせていただき、1日の飲む回数、量を0・1で決め飲み始める。すると、どうであろうか。二日

信号は、私たちに人生の一つの山場を告げ、二人の心身をかき乱した。

家族の健康を守れない自分への怒り、なかなか進まない家の改修、造園の仕事、家事、主人の朝晩の洗髪。

解体と同時に主人に起きた体の信号は、私たちに人生の一つの山場を告げ、二人の心身をかき乱した。

朝起きてすぐに症状を見ながらアスタジー何粒飲むか0・1、改修中、問題が起きるたび0・1、一日作業して帰りのスーパーで食材を0・1、入ってきた造園の仕事のコンセプト、植える樹種や土壤の0・1、自宅改修における工法や材料の選定を0・1、0・1、0・1、0・1……

三日目に、ピンク色の薄膜がはつた。あんなにも滴れていた膿がみるみるなくなっていくではないか。赤ちゃんのような、薄皮。アスターも無くなつた。その後はアスターは必要なし！ 自然に任せ良し！ と0・1が示した。

この時の生活が今の私たちに繋がる。

朝起きてすぐに症状を見ながらアスタジー何粒飲むか0・1、改修中、問題が起きるたび0・1、一日作業して帰りのスーパーで食材を0・1、入ってきた造園の仕事のコンセプト、植える樹種や土壤の0・1、自宅改修における工法や材料の選定を0・1、0・1、0・1、0・1……

この時の生活が今の私たちに繋がる。

この時の大工さんも解体完了の知らせを聞き、いよいよ建築開始！

解体後の家には日光が入り、清らかな風がスーと抜けてゆく。

長年溜まっていた穢れ、余計なものが多くなつた家は息を吹き返したかのように力強く呼吸をしていた。

奇しくも時同じくして起きた、体の変化と家の大解体。

あれは次なる段階へ行くための大净化であつたのだろうか。

頭皮のただれも首のかゆみも無くなつた清々しい主人の表情と、スカスカの軀体だけとなつた素顔のこの家が重なつて見えた。



頭のかぶれ



解体後の室内